



書室は自由に本を読む場所ですが、子どもたちの様々な声に触れることができる場所でもあります。本のことはもちろんですが、他にもいろいろな話を聞かせてもらえます。

「映画のところでくるくるの化石を見つけた！そこで赤色と緑色のお宝も見つけたんだよ」と話してくれたのは5歳ぐらいの女の子。おそらくはアンモナイトの化石を模したレリーフと床に埋まったガラス玉を見つけたのだですね。また、先日は虫の本を探している男の子がいました。お話を聞くとカエルも大好きとのこと。カエルが飼いたいだけでなく、家のまわりには田んぼや池がなくカエルの声が聞こえず、「セミばかり鳴いているんだよね……」とちょっと残念そうでした。好きな遊びは「あやとり」という女の子は、『そらをとんだけいこのあやとり』（福音館書店）を見つけ、家に帰ったらおばあさんと一緒に読むのだと本を購入されました。

子どもたちの「見つけた喜び」や「好きなものに出会ったこと」の報告に、私たちスタッフは日々元気をもらっています。



季刊トリホークス 2026年 | 84号

発行日……2026年9月3日 | 発行人……中島清文

発行所……徳間記念アニメーション文化財団

東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館

編集……石光紀子 宮村博人 | デザイン……川島弘世

印刷……TOPPANクロレ株式会社 | 非売品



絵本と子どもと歩いた日々

2022年に亡くなった山脇百合子さんの初のエッセイ集をご紹介します。山脇さんは、子どもの本の画家として、姉の中川李枝子さんとともに『ぐりとぐら』（福音館書店）、『けんとうさぎ』（のら書店）をはじめ、数多くの名作を生み出してきました。また、様々な媒体にエッセイも寄稿していました。本書には、子ども時代の思い出や絵を描くこと、子育てのことなどを綴った21編が収録されています。刊行にあたっては、過去の寄稿文をもとに山脇さんへのインタビューが行われ、加筆訂正を重ね、一冊にまとめられました。

山脇さんのエッセイ集として貴重な一冊であり、また、現在美術館で開催

している「山脇百合子の仕事部屋」展とあわせて楽しんでもらいたい一冊でもあります。エッセイからは、山脇さんがどのような思いで絵を描き、作品と向き合っていたのか、その思いや日々の暮らしが伝わってきます。企画展示室に再現された仕事部屋の前になると「まさにこの机で、こんなことを考えながら仕事をされていたのだ」と、エッセイの言葉と目の前の風景が重なるのです。巻末では、山脇さんの長女である祐子さんが、山脇さんとの思い出を語られており、ここに登場する様々なもの「ランドセルに入れる時間割」や「蛇の抜け殻」なども、実際に展示室でご覧いただけます。



絵本と子どもと歩いた日々

作……山脇百合子
編……のら書店編集部
のら書店 2,200円

山脇さんの温かなお人柄に触れることができるエッセイ集です。美術館の企画展示とあわせてお楽しみいただけたらと思います。

荒井良二

Ryoji Arai

夢中になって読んだ本

絵本にとどまらず、絵画や空間を使った作品など、多彩な表現活動を行っている荒井良二さんに本を紹介していただきました。大切にしてきた、たくさん
の本から選ばれたのは『おやすみなさい おつきさま』です。緑に赤の色彩が印象的な小さな絵本。その1ページ、1ページに広がる静かな世界を、ゆっくり楽しんでください。



写真…池田晶紀

* * * * *

19 歳の僕。美術を学び、デザインを専攻する大学1年生。大学に行くことよりも本屋さんにいる方が多かったかもしれません。大きなフロアの1番奥まったスペースに児童書、絵本コーナーがあり、そして初めて見る洋書の絵本。僕が絵本に関心を持ったのが18~19歳だったので、見たこともない外国の絵本は、ただ手に取るだけで魅力的だったんだろうと思います。たくさんあった洋書の絵本の中でも、そこに行くたびに何度も何度も繰り返し開いたのは、『GOODNIGHT MOON』（M.W. ブラウン作、クレメント・ハード絵、1947年）。1975年当時、3300円の値段がつく本はおいそれとは買えない高価なもので、何度も通っては絵本1冊、丸ごと脳裏に焼き付けて帰ることを繰り返していました。

何がそんなに気に入ったのかと言うと、本を持ったときの手触り、めくる紙の質感、印刷インクの匂い、アルファベットで組まれた文字、そして造本……。これらが1番の要因なんだろうと思います。絵本のストーリーももちろん大事ですが、この時はこれらの要素に圧倒されたように思います。それから、物語の中に入っていったのを覚えています。

肝心の絵本のストーリーです。うさぎのおばあさんと、寝る支度を整えた子うさぎがベッドに入って、部屋にある電話や、風船や額縁の絵など、あらゆる目につくいろんなものに「おやすみなさい」を言っていくという、小さい子によくありがちな寝る前の儀式をつづっているお話です。子うさぎがいろんなものに挨拶をして一向に眠る気配がないのを見て取り、おばあさんが小声で注意をします。そのかわいなおとがめの後、子うさぎは眠りの中へと誘われていく……。同時に、この絵本を見ている読者である子どもも眠りにつくという、いわゆるベッドタイムストーリーなのでしょう。

絵を描いたのはクレメント・ハード。色数がものすごく少ないのに、それを有効に使っていて、色のページ（見開き）、次がモノクロのページ（見開き）になる構成。なぜこういう構成なのかわかりませんでしたが、文章のリズムと呼応するように成り立っていて、そこにすごく魅力を感じました。（後々知ったことですが、その当時の印刷技術から割り出された構成かもしれません。）

だいぶ早い段階で、窓から覗いているお月さまにおやすみを言うのですが、ベッドの布団から出たり入ったりしている、なかなか寝付けないうさぎの様子がかわいらしい。本の終わりのほうに

「stars」と「air」と「noises」におやすみと言うのですが、その時にはうさぎの目は閉じているように思われ、耳で遠くを想像しながら口でおやすみを言っているんだと思います。

大学生の僕にとって、ここのくだりは何度読んでも胸に迫るスケール感がありました。僕もこういうスケール感の大きな絵本を作りたいと思ったのを覚えています。僕は英語版を何度も見ていたわけで、当然、僕流の訳し方で読んでいました。正確ではないにしろニュアンスは汲み取りやすいと言うと語弊がありますが、僕にでもわかる英語に見えてしまい、勝手に訳してしまいました。

そして「Goodnight air」ですが、当時、そのまものの直訳もいいところで、「air」を空気と思い込んでしまったんです。それでも雷に打たれたように、電流が全身に走ったわけです。何しろ空気におやすみを言うんですから！ そのことに、カルチャーショックというか、詩的なイマジネーションにやられてしまいました。

しかし！ だいぶ時間が経って気づいたのですが、日本語版が出たと言うので、本屋さんに行って買って帰って見ていた時です。瀬田貞二さんが訳されていて、その「air」のところはどんなふうに書かれているのだろうと胸を踊らせていたら……「おやすみ よぞらさん！ そうか！ 空気じゃなくて「空」そのもののことなんだとわかって、1人で赤面してました！ 半分呆れて……。でも

僕は僕の訳に驚いたわけではなくて、あくまでも「air」におやすみを言うことに胸打たれたことには違いはない！ 少し悔し紛れもあるのだけれど、そう思うことにしたんです。しかも、「noises」にまで、「音」にまでおやすみを言うわけですから。

この絵本にはいつまでも驚かされるし、見えないものまでも含めて言葉にし、絵にしながら絵本を作る姿勢は、僕に大きな影響を与えてくれた、「出会い」の1冊となったわけです。

おすすめしたいM.W.ブラウン作の絵本はまだあります。今回はおすすめと言うよりは、僕の絵本の入り口を示してくれた本に敬意を込めて紹介する形となってしまいました。あしからず、ご了承いただければ幸いです。

あらいりうじ

1956年、山形生まれ。絵本作家・イラストレーター。2005年に日本人として初めてアストリッド・リンドグレン記念文学賞を受賞。他JBBY賞、産経児童出版文化賞・大賞、日本絵本賞大賞などを受賞。絵本作品に『あさになつたのでまどをあけますよ』『きょうはそらにまるいつき』（偕成社）などがある。

トライ
ホークス
の本

そりゃあもう
いいひだったよ
作…荒井良二
小学館 1,430円



1



2



3



4



5

- ① おやすみなさい おつきさま 作…マーガレット・ワイズ・ブラウン 絵…クレメント・ハード 訳…せたていじ 評論社 1,320円
- ② ぼくらにできないことはない 作…エーヴァ・リンドストロム 訳…よこのなな 岩波書店 1,760円
- ③ 空はみんなのもの 文…ジャンニ・ロタリー 訳…関口英子 絵…荒井良二 ほるぷ出版 1,870円
- ④ ちいさなとりよ 文…マーガレット・ワイズ・ブラウン 絵…レミー・シャーリップ 訳…与田準一 岩波書店 品切重版未定
- ⑤ 走れ、走って逃げろ 作…ウーリー・オルレブ 訳…母袋夏生 岩波少年文庫 836円

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にしていただけたら嬉しいです。

ハヤ号セイ川をいく

長らく品切れていたおすすめの本が復刊されました。『ハヤ号セイ川をいく』です。作者はフィリパ・ピアス。図書館でもおなじみの『トムは真夜中の庭で』や『真夜中のパーティ』（岩波書店）の作者であり、イギリスを代表する児童文学作家です。講談社の青い鳥文庫で出版され重版未定となっていた作品が、今回、訳も新たに岩波書店から刊行されました。

主人公は11歳のデイヴィッドと14歳のアダム。ある時、デイヴィッドはセイ川を流れるカヌーを見つけます。それはコドリ屋敷に住むアダムのものでした。2人はカヌーを「ハヤ号」と名付け、アダムの家に伝わる宝物を求めてセイ川へと漕ぎ出します。

少年たちにとって「宝探し」は心躍る冒険です。しかし、アダムには切実な事情がありました。両親を亡くし、おじいさんとお婆さんの3人で暮らすアダムは、家計の困窮からパーミングの親戚の家に引き取られることになっていました。この土地を離れたくないアダムは、400年以上も前に先祖のジョナサン・コドリ屋敷に隠したという宝を、何としても見つけたかったのです。

400年以上も誰にも見つけられなかった宝を見つかることはできるのでしょうか。「やっと宝が見つかった」と思う読者の期待を何度も裏切り、ひとつ謎が解けたと思ったら、また次の謎が現れ、一筋縄ではいきません。子どもたちだけでなく、大人たちも謎解きに関わりながら、物語は宝の発見へと進んでいきます。

この本は岩波少年文庫の中でも少し厚めの一冊ですが、ぜひ時間をかけて丁寧に読んでいただきたいと思います。情景描写、心理描写の名手であるピアスの世界に、謎を解くための手がかりも巧みに散りばめられています。細部にも目を留めながら読み進めると、それらの手がかりが少しずつ結びついていくおもしろさを味わえると思います。



ハヤ号セイ川をいく

作…フィリパ・ピアス
絵…エドワード・アーディソニー
訳…原田 勝
岩波少年文庫 1,430円

日本の昔話より

ぜかいーのおりこうさん

むかしむかしのこと。港のそばのある村に、ひとりの男の子が生まれました。赤ん坊はいつも機嫌よく、ぐずったり泣いたりすることはありませんでした。よちよち歩きをする頃になると、親の言うことは「はい、父ちゃん」「はい、母ちゃん」と何でも素直に聞きました。「こんなに良い子はめずらしい」と、どこへ行ってもほめられます。あまりに良い子すぎるので、父ちゃんと母ちゃんはかえって心配になってしまいました。

ある日、父ちゃんが「あの子に5銭玉を3つやって、ふねいっぱいの大もうけをしてこいと言ったら、なんぼなんでも嫌だというだろう」といいました。母ちゃんも「そんなことできこえないもの。きっと嫌っていうでしょう。わたしもあの子に嫌って言わせたい」といいました。父ちゃんが「この5銭玉3つで、大もうけをしてこい」と男の子にいうと、「はい、父ちゃん」と元氣よく家を出ていきました。

日本の昔話から良い子が主人公のお話です。親は悪い子だけではなく、良い子であっても心配になるものです。素直な良い子には、人の助けや幸運が味方してくれるのかもしれない。男の子は大もうけできるのか、続きは本を読んでみてください。



よみたくい ききたい むかしばなしのまき ねこのおんがえし

文…中川李枝子
絵…山脇百合子
のら書店 1,650円